

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がい児一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな学力の定着を図る学習指導の充実 2 豊かな心と健やかな体の育成 3 よりよい社会参加に向けての豊かな自己表現力の向上</p>
---------------------------	---	----------------------	--

評価項目		年 度 当 初			評 価 結 果 (2) 月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
確かな学力の定着を図る学習指導の充実	(教務部) ○各表簿類、指導計画、支援計画の作成・運用について、職員がスムーズに作業ができるようにする。	○新しい職員が多く、また、初めて教務を担当する職員もいるので、作成・運用について周知・徹底する必要がある。	○各表簿類、指導計画、支援計画の作成・運用について全職員が理解し、各表簿類等が適切に進行されている。	○教務部員が、日程のゆとりを持って準備や職員への周知をし、定期的に確認していく。	○全体的には日程のゆとりをもって準備や職員への周知をし、定期的に確認を行った。ほとんどが適切に表簿作成が進行されていたが、一部に提出期日が遅れる部分があった。	C	○表簿の進行状況は、必要なものは月単位で確認を行い、確実に遂行されるように職員との連携を強める。
	(教育研究部) ○幼児児童生徒の基礎学力の定着を図るため、国語科、算数・数学科に焦点を絞って校内の研究を進める。	○担任や担当がそれぞれ工夫して日々の学習指導に当たっているが、学力の向上、基礎学力の定着や家庭学習の習慣等がなかなか身に付かない状況にある。	○基礎学力が向上し、定着している。	○幼児児童生徒のつまずきを拾い上げ、その指導法について伝え合い授業に生かすとともに、自己評価票を使って学習意欲の向上につなげるような指導を行う。	○全体授業研究会を実施したり、参観ウィークを活用して指導案を作成し、お互いに授業を見合ったりしてグループで検討を行った。	B	○実践を行うためにも理論や定義づけを行い、進めていく必要がある。
	(教育研究部) ○聴覚障害教育の専門的な研修と教科指導等一般的な教師としての専門性を高めるための研修を計画する。	○日々子どもたちの指導には聴覚障がい専門的な知識や技能のみならず、教科としてのジェネラルな知識や技能も必要である。	○職員研修が充実する。	○職員研修を聴覚障がいの専門的な研修(スペシャル)と教科を指導する指導力の向上を目指す研修(ジェネラル)とを組み合わせ職員研修を計画する。	○教育研究部が全ての研修を総括していないので、トータル的にどれくらい先生方が研修を受けたのかまでは把握できていないのが実情である。しかし、研修内容をできるだけニーズに応じたものにし、選択性にしたことはよかった。また、学部の意見を反映した研修内容を組んだこともよかった。	B	○来年度も全ての職員のニーズに応じない研修を計画することは不可能であるが、できるだけ職員や学部のニーズに応じた研修を計画する。
豊かな心と健やかな体の育成	(教育研究部) ○幼児児童生徒の自己認識力を高めるために、キャリア発達の視点より校内研究を進める。	○学部ごとでの子どもたちの自己認識に関する指導は系統立てたものがなされているが、豊学校在籍中(乳幼児～高等部)を見越した系統的な指導を行うことが難しい状況にある。	○本校独自のキャリア発達支援が確立する。	○本校独自で作成した「キャリア発達支援」の段階表を活用し、検討していく。	○全体授業研究会を実施した。キャリア発達の領域が新しく変わり、合わせて本校の段階表を見直しているところである。	C	○実践をさらに行うために、理論や全体での位置づけ等を丁寧にを行い、進めていきたい。
	(生活安全部) ○生徒の規範意識を高め、将来、社会に向けての自立できるように指導を促す。 ○生活全般を見直し、常に健全な健康状態を保つことができるよう指導を促す。	○生徒の将来を見据えた指導が不可欠である。将来、自立のためにも一定の規範意識を育てる必要がある。 ○健康の保持・増進のために、自らの健康状態をしっかり把握し、管理できる能力を育てる必要がある。	○生活全般において職員の共通認識のもと温度差のない生活指導を行う。 ○健康の保持増進の3要素(栄養・運動・休養)を理解させる。また保健目標を具体化し啓発を行う。 ○学部間の連携が行われ、本校の中で系統性のある一貫した指導が行われる。	○定期的な頭髪・服装検査等の実施による生徒への啓発を行う。 ○日常生活における迅速な生徒指導を心がけ学部内の連携を深める。 ○細やかな観察・啓発により生徒の健康状態を把握し早期発見・対応を行う。	○頭髪・服装を遵守するなど生徒の意識は定着したように感じるが継続した指導をするように心がけたい。生徒情報の共有が迅速な生徒指導に結びついていることが明確になったので今後も連携を図りたい。何気ない声掛けであっても毎日継続することにより生徒の変化に気がつくことが多いため、常に意識できるように職員にもお願いをしたい。	B	○生徒の規範的意識を高めるためにもその場に応じた対応をすることが大切と感じる。将来社会に進出するためにも様々な場面において思考→判断→実行を繰り返すより良い判断ができるように促し、指導することが課題である。
よりよい社会参加に向けての豊かな自己表現力の向上	(総務部) ○学校公開を通した啓発活動を推進する。 地域の保育所・幼稚園に向けて啓発活動を行う。	○学校公開では、来校者が学校関係にある程度限定されているようで、広がりが不十分である。 ○保育所・幼稚園の啓発活動は計画通りに進み、本年度である程度の区切りが見られる。	○学校公開、保育所・幼稚園への啓発活動、『とりろうだより』などの取り組みで、本校の教育を地域等に広げる為、情報をより発信していく。	○学校公開の週間に多く来ていただけるよう、案内に工夫をする。 ○公開内容を工夫する。 ○『とりろうだより』をより充実したものにす。	○公開内容を一瞥にして知らせた。アンケート用紙を保護者用と来校者用に別けて作成し、配布方法も変え、性教育委員会と連携して実施できた。啓発活動は今年度一応の区切りを迎え、啓発が広がっている。「とりろうだより」は幼児児童生徒の活動だけでなく、来年度に向けた教員の研究について紹介し、今年らしきが出たものとなった。	B	○公開学習については、寒い時期でもあり戸を開けておくのは困難だったが、戸口に張り紙をするなどして、自由に開けて入りやすくすると良い。
	(教育研究部) ○伝え合う力の段階表を作成し、研究グループの全員がそれを活用した授業実践を行う。	○幼児児童生徒は積極的に自分の思いを表現することや相手の気持ちを推し量ったり理解しようとしたことが難しい状況にある。	○伝え合う力を高める授業の実践をする。	○朝の会、音楽科、体育科の学習において、伝え合い活動を取り入れるとともに、段階表を作成し活用することで、伝え合う力を高める。	○「伝え合う力」段階表や「伝え合う力」シート、「伝え合い活動」の記録を作成しPDCAサイクルでの授業実践に向けて取り組んだ。授業における活用状況については若干の差があった。	B	○大阪教育大学教授の井坂行男氏より、「伝え合う力」段階表等について助言をいただいた。改善を図るとともに、各学部の実践を共通理解しながら連携して取り組んでいきたい。
	(教育研究部) ○系統立てた職員手話の研修会を計画する。	○在籍の幼児児童生徒とのコミュニケーションを図るために手話等を活用していく必要があるが、職員も異動もあり、職員がコミュニケーションに必要なモードを十分に活用できていない状況にある。	○職員の手話力が向上する。	○職員の手話力の向上を図るために、職員の手話の研修会を計画する。	○行事や出張等の関係もあり、参加できない職員もあったが、放課後の職員手話研修会は回数が進んでも参加者が減少することはなかった。	B	○今年度の手話のテキストをさらに検討し、よいものにしていきたい。今年度はテキストの作成に時間がかかり、スタートが遅れたが来年度はできるだけ早く開催したい。
	(進路) ○家の手伝いや学級で割り当てられた係、当番の仕事、職場体験・現場体験学習に積極的に取り組ませる。	○社会性がまだまだ不足している幼児・児童・生徒がみられる。また、鳥取県における高卒者の離職状況が、就職3年後に50%近い状況になっており、全国平均を上回っている。	○すべての幼児・児童・生徒が、積極的に取り組むことができる。	○家の手伝いや係や当番の仕事をはっきりと決め、それに取り組ませる。また、体験実習の事前指導・巡回指導等で実習の状況を把握し、不十分な点はその都度指導していく。	○大部分の幼児・児童・生徒が、係や当番の仕事及び実習に責任を持って取り組むことができた。しかし、まだまだ実習で実習の状況を把握していない生徒等もみられる。	B	○まだ積極的な取り組みにまでは至っていない生徒等もあるので、来年度も継続して指導を行う。